一　「金浦」という地名について

高原の集落である「金浦」がなぜ海に関係ある「浦」という文字が使ってあるのか。磯部郷金浦と奈良時代からすでに呼ばれているし、磯部にしても隣村の塩田にしても同じことがいえるのである。金浦の中の地名も「洞（ほら）」「クジラ峠」と海に関係がありそうな地名もある。太古の昔は海の底であったようだが、歴史時代はすでに陸地であった。粟鹿山にも船着き石，帆解け岩、千石岩など水にちなんだ名前も残っている。磯部という地名も滝田に「石部神社」があるので磯部と呼ばれるのだという説もあり、塩田も昔は塩淵の里と言われ、塩水の湖があったがのちに枯れてしまったという話である。

磯部郷は平安時代には伊勢神宮の荘園だったのだが、伊勢神宮を祀る部民を伊勢部と言い、伊勢神宮のある場所も磯部町というが、朝来の磯部という地名成立も伊勢神宮と関係があるのかもしれない。

こういう水にちなんだ地名の多い中での「金浦」だから、水と切り離しえないロマンがあり、ゆかしい思いがする。

この地名は平安時代の延長三年五月に但馬国の役人が朝廷に報告した「国司文書」“但馬世継記”に記載されている。伝説として大切にしたい話ながら千百年昔から「金浦」という地名があったことは誇るべき事実である。

「但馬世継記」から

（国司文書・延長三年・西暦九百二十五年）

金浦の里

塩淵の里の東にあって金浦神社がある。佐波后彦命（さわみちひこのみこと）、佐波治姫命（さわみちひめのみこと）、味澤姫命（あじさわひめのみこと）を祀っている。丹波と但馬の人が祀るので又二國神社と言っている。

「夜久野ケ原」

夜久野ケ原の夜久野という名称は、丹波の国天田郡の夜久郷に由来すると考える。少なくとも奈良時代末期～平安時代初期より夜久郷として郷が確立していた。これは現在の夜久野町全域をカバーしていたと推定されている。やがて江戸時代末期～明治初期から「夜久野郷」と呼ばれるようになった（下夜久野村誌）。京都府唯一の火山、田倉山にちなんでか「焼野」という呼び名や薬草も多々あり「薬野」といったという話も残っている。

いずれにしても夜久郷の高原ということで呼ばれていたのであろう。応仁の乱の古戦場として「夜久野ケ原」と呼ばれていることも付記しておきたい。